書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ルイ・アルチュセール

終わりなき不安夢

夢話 1941-1967

市田良彦訳

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

Louis ALTHUSSER

DES RÊVES D'ANGOISSE SANS FIN
Récits de rêves (1941-1967) suivi de UN MEURTRE À DEUX (1985)

© Éditions GRASSET & FASQUELLE et IMEC, 2015

This book is published in Japan by arrangement
with GRASSET & FASQUELLE,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

終わりなき不安夢　目　次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

まえがき……オリヴィエ・コルペ　10
訳者まえがき……市田良彦　27
アルチュセール略年譜　31
プレリュード　夢はつねに生に先んじる　35
解説　エレーヌとそのライバルたち……市田良彦　48
1　一九四一　潜水艦でクルージング　59
2　一九四四　腐った桃　67
3　一九四五　草原の夢　71
4　一九四七　死者の帰還　73
5　一九四九―一九五〇　抗う女　79
6　一九五六　喉に木靴の音が　97
7　一九五七　鳥かご　113
8　一九五八　夢の味　117
9　一九六二　万引き　119
10　一九六三　灰の夢　131
11　一九六四　a. ほんとうの父を求めて　147

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

b．家族の暮らし　165
c．前兆夢　201
12　一九六七　鍵となる夢　211
13　日付なし　強烈な性夢　213
解説　アルチュセールにおける精神分析の理論と実践……市田良彦　216
エピローグ　二人で行われた一つの殺人――主治医作を騙るアルチュセールの手記　235
謝辞　256
夢を読む……市田良彦　257
1　夢話と二つの「自伝」が作る環――哲学者の「自己への関係」　258
2　無力と闘う「戦略／演出」――アルチュセールの哲学（1）『事実』　266
3　夢／演劇を見る「体験」――アルチュセールの哲学（2）『ピッコロ』、ベルトラッチーとブレヒト」　275
4　第三種の認識としての夢――アルチュセールの哲学（3）「スピノザ・ノート」　283
5　AIE（国家のイデオロギー装置）の力――『未来は長く続く』（1）　289
6　AIEとしての病院、イデオロギーとしての精神医学／精神分析――『未来は長く続く』（2）　298
7　ピエール・リヴィエール、ルイ・アルチュセール――『未来は長く続く』（3）　305
アルチュセールの死後出版著作　316

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

終わりなき不安夢

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

ルイ・アルチュセール

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

まえがき

オリヴィエ・コルペ

アルチュセールは多くの夢を見た。「やたらに見る。いちいち書きとめたりしないが、見すぎだ」[1]。一九四七年九月、すでにパートナーであった将来の妻エレーヌ[2]に宛てた初期の手紙の一つに、そう記されている。出会ってまもない頃であった。その少し前には、彼がどちらかと言えば「おもしろい」（ママ）と思う夢の話を彼女に書き送っている。その少しあとには、まったくもって不快な別の夢を彼女に打ち明けている。死んだ友人たちが甦る夢である。「とてもいい夢かどうかわからない」と、意図せざるユーモアをもって彼は付言している[3]（本書収録の一九四七年の二つの夢話を参照）。現実には、少しあとにエレーヌに明かしているように、彼の夢には「ひどい悪夢」が多かったのである[4]。何日かして、昼間はなにもかもうまくいった日の翌日、彼女にこう書き送っている。「夜になると無意識が暴れまわった。明らかに、度が過ぎていた。悪夢だった[5]……」。

大量の夢、うなされる夢の数々のうち、アルチュセールは一部を記録して保存していた。タイプライターで打ったものさえある。彼の書庫には、一九四七年から六七年までのそうした記録がいく

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

つも残されている。独立した夢話もあれば、「日記」の断片もある。「日記」は日付の付いたノートからなっており、女性たち（エレーヌ、クレール[6]、フランカ[7]が主である）や近親者（『未来は長く続く』[8]を書いていた一九八五年の春は特にそうである）、さらに彼の分析家たちのことが記されている。つまり、とりとめなくランダムな「日記」であり、いくつかの日の記録を取っておいたという程度のものである。夢話と日記断片を区別せず雑然と保管することに、躊躇いの跡はない。

本書の編纂は、説明の必要な複雑な作業となった。その理由と編纂方針を明らかにしておこう。哲学者の夢に、なぜ個別の著作という境遇を与えるのか。そして、なぜ今なのか。

最初の問いに答えるのは容易である。アルチュセールが残した文書のなかには、まとまった夢の筆写記録があるのである。それらは「夢」というタイトルが書かれたファイルに保管されており、確

（1）Louis Althusser, *Lettres à Hélène*, Grasset/IMEC, 2011, p. 76.〔ルイ・アルチュセール『エレーヌへの手紙』、未邦訳。アルチュセールの死後出版全般については、本書の巻末リストを参照されたい。〕
（2）〔訳注〕本書の「解説　エレーヌとそのライバルたち」を参照。
（3）*Ibid*, p. 87.
（4）*Ibid*, p. 465
（5）*Ibid*, p. 470.
（6）〔訳注〕本書の「解説　エレーヌとそのライバルたち」を参照。
（7）〔訳注〕同。
（8）〔訳注〕ルイ・アルチュセール『未来は長く続く』、宮林寛訳、河出書房新社、二〇〇二年。

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

訳者まえがき

市田 良彦

本書は Louis Althusser, *Des rêves d'angoisse sans fin : Récits de rêves (1941-1967) suivi de Un meurtre à deux (1985)*, Grasset/IMEC, 2015 の翻訳である。サブタイトルに含まれている「二人で行われた一つの殺人」（本書エピローグのタイトル）は邦題からはずした。日本語版読者のために、訳者による二つの事項解説と、同じく訳者による独立した一つの書き下ろし論考を加え、さらに略年譜とアルチュセールの死後出版著作リストを付した。「解説」は、アルチュセールと特別な関係にあり、本書にたびたび登場する女性たちについてのものと、「夢話 récits de rêves」を断続的に書き続ける動機の一つであったはずの彼自身の精神分析経験についてのものである。これらは夢話に先だって読まれるべきテキストかもしれない。それに対し論考「夢を読む」は、見た夢をそのまま綴るという原テキストの性質上、脈略を欠き散漫なところを含む本書を、アルチュセールの仕事全般に関連づけて読むための訳者なりの指針として読んでもらえれば幸いである。なお原著には、校訂上の方針を記したコルペによる二頁の解題が含まれているが、日本語読者にはほぼ関係のない内容であるため、訳出を省

アルチュセール略年譜

一九一八年（〇歳）一〇月一六日アルジェ近郊で生まれる。
一九二一年（三歳）妹ジョルジェット生まれる。
一九三二年（一四歳）父の転勤によりマルセイユに移る。
一九三六年（一八歳）父の転勤によりリヨンに移る。
一九三八年（二〇歳）抑鬱症状が現れる。周囲には猩紅熱を偽装。
一九三九年（二一歳）七月高等師範学校文科合格。九月召集礼状が届く。
一九四〇年（二二歳）出征後まもない五月、フランス国内で部隊ごとドイツ軍の捕虜となり、ドイツ領内の捕虜収容所に移送されて一九四五年までそこで過ごす。その間三度、抑鬱状態に陥り病院に収容される。四〇年末ないし四一年はじめ、母と妹はモルヴァン地方ラロッシュミレー（母の実家）に疎開、父はリヨンに残る。以降、両親は別居。
一九四五年（二七歳）五月復員。母と妹がモルヴァンから疎開していたカサブランカ（モロッコ）に行く。妹とほぼ同時に抑鬱状態に陥り、二人とも入院。九月高等師範学校に復学し、妹とともにパリに移る。母はモルヴァンに転居、以降、そこで暮らす。
一九四六年（二八歳）エレーヌ・リトマンと出会う。
一九四七年（二九歳）三月抑鬱のためサンタンヌ病院に入院し、早発性痴呆（現在の統合失調症）と診断されるが、入院中に病名を躁鬱病と変更される。電気ショック療法を受ける。一〇月ＤＥＳ（高等研究免

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

プレリュード

夢はつねに生に先んじる

クレールの二つの夢についての解釈
クレールへの手紙（1958 年 2 月）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

■ クレール宛、一九五八年二月二二日付、タイプ打ち。

土曜一六時三〇分　五八年二月二二日

いとしい人へ

きみの夢について。[1]

ジュリー[2]が登場する夢。

きみの目の前で、ぼくがジュリーとセックスする。そこにはきみのなにかが示されている。確実にとても深い願望だが、その根っこはぼくにはわからない。きみにもわからないだろう。けれども、きみよりも前にぼくがそれを知ることになるはずだ（当事者は隠れた意味をつねに最後に知らされる）。おそらく、いつだったかきみの語ってくれた、エロチックなテーマにきみが惹かれるという話にかかわっているだろう。きみは同時にその引力と闘っていた。ぼくに打ち明け話をしてくれたあと、すぐにこう付け加えていたから。「でも私はまだそんな歳じゃないし……」。こうしたテーマに結びついて、明白な観念もある。もしきみがこのエロチックなゲームに加わっていれば、きみとぼ

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

くの交合はもっとも激しい部類（官能の次元で）のものになるはず。そこにこそ映像においていちばんだいじなテーマがあると思う。けれど、用心しないといけない。夢に登場する人物は必ずしも現実の人物ではない、ということ。つまり、J［ジュリー］とぼくはJとぼくであるだけなく、ほかの一般的なだれかであってもいい。慎重に、しかし大きな確信をもって、こう結論していいかもしれない。このテーマに表現されているのは、きみの深いところにある、男性と非常に強いエロチックかつ官能的な絆で結ばれたいという願望と、その強い絆はその男とのエロチックな行為のスペク

（1）一九五八年二月一六日付、ルイ・アルチュセールに宛てたクレールの手紙から抜粋する。

［［…］それから、いくつか夢を見ました。あなたについての夢も。一つの夢で、あなたはジュリーとセ……していた。けれど彼女は（あきらかに実際の彼女とは違って）あちこちから醜くなっていき、それが私にあなたへの嫌悪をもよおさせた。つぎの夢では、私はあなたに持ち家を貸したのですが、あなたはそれを滅茶苦茶にしてしまった（あなたは雨漏りを放っておきさえする！）。あなたは不快な若者たちを招き入れ、彼らが家を動物の巣のようにしてしまった。だから私は、あなたを訪ねていったものの、コートを脱いであなたに言う。お別れね。あなたは泣いていました。私も。私たちは二人ともわかっていたんです。すばらしい時間（現実生活で私たちがすごした時間のことです）をともにしたあとに訪れた、見た目はユーモアの気配をもってなされたこの別れが決定的であることを。私たちは二人とも深淵の縁に立っていました。壊れた愛を前になすすべもなく、そして、もうなにもできないことに絶望して。

私が出てくるあなたの夢が、もっと元気の出るものでありますよう。［…］］

（2）詳細不明。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

解説　エレーヌとそのライバルたち

市田良彦

エレーヌ・リトマン。一九一〇年、パリで東欧系ユダヤ人夫婦の末子として生まれる。アルチュセールより八歳年上である。『未来は長く続く』[1]によれば、彼女は一二歳のときに父親を、一三歳のときに母親を、それぞれ癌で失っている。しかも二人とも、彼女が注射を打って安楽死させたという。医者が行えば犯罪になったからだろうか。とにかく、二七歳のアルチュセールと出会う一九四六年一月には、彼女にはもう身寄りがなかった。ただ、ある種のアウラを身にまとい、けっして狭くない特殊な交友関係のなかにいた。サビーヌ、ルゴシアン、マルタン、プレウスト、といった組織名を使い分ける、リヨンを拠点とするレジスタンスの「共産党員」活動家。党員であることに付けざるをえない括弧の由来が、アウラを増幅させていた。地下活動に従事しているあいだに、彼女は党との連絡を失い、彼女を党員であると知る人をすべて殺されていた。なおかつ、ユダヤ人の救出に協力した神父をゲシュタポに密告して処刑させたスパイではないか、と疑われていた。嫌疑がどこかに正式に告発されたわけではないものの、党は彼女の党籍確認／再登録を拒んでいた。政治的に正反対の向きをもつ噂もあった。ソ連内務人民委員部（ＮＫＶＤ――のち

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

- 1 -

1941

潜水艦でクルージング

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

捕虜日記より。手帳に手書き。一九四一年二月七、九、一一日。『捕虜日記』Stalag X-A, 1940-1945』、パリ、Sock/IMEC刊、一九九二年、四三―四四頁。

二月七日

「二月六日」[6]に居合わせた夢を見た。裸の死体の山、遠ざかる飛行機、機銃掃射。ついで静寂。ぼくの前には林が広がり、木々のあいだに、年老いた色白の女たちのグループと一人の若い女がいる。ぼくは彼女を見つめ、動揺している。これから彼女とセックスすることになるだろう、と、もう感じている。しかしそれをどう彼女にわからせればよいのか。突然ひらめく。ぼくは前に進み出て、ゆっくり、会釈しながら一人ずつ老婆の手に口づけしていく。若い女だけ飛ばすわけにいかない。彼女の柔らかい手を、唇に長く押しつけている。

二月九日

潜水艦でクルージングする夢。シモン[7]が操舵している。だがどこへ向かっているのだろう。朝靄

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

のなかから突然海岸が姿を現す。夜のあいだはノルウェーの沿岸にいると思っていたけれども、実はスエーデン。特徴的な風景。切り立った海岸、粘土質の地面、丘の腹には生育は悪いが青々とした松の木、赤い屋根、なにより、みごとな艦船。真新しい木で作られたカラベル船だ。驚異的なマスト群に、視線は天を仰ぐ。キール部分と船腹には美しい絵が描かれている。ぼくはそれを下から見上げている。そして奇妙な建物の数々。潜水艦は海岸をただ一隻、巡航している。シモンは見て

（6）一九三四年二月六日にパリで起きた、極右のデモ。「いわゆるスタヴィスキー事件（ユダヤ系銀行家スタヴィスキーが、政府高官を巻き込んだ詐欺事件を起こし、逃亡の末に自殺した。真相発覚を恐れた政府による謀殺であったとも言われる）の結果、当時の急進社会党政権が大混乱に陥り、機に乗じたアクション・フランセーズ、愛国青年同盟、火の十字団などの極右団体が、国会周辺で大規模な反政府デモを組織した。未遂に終わったものの、クーデター計画も存在した。デモ隊の一部は議場にまでなだれ込み、やがて「二月六日事件」と呼ばれるようになる。当時リヨンのリセの生徒であったアルチュセールは教師（六九頁注11参照）の影響で、「中産階級と（社共）人民戦線」を敵視し、極右にシンパシーを抱いていた。同じリセの数年上の卒業生からは、アクション・フランセーズのイデオローグとなった哲学者ピエール・ブータン（アルチュセールの伝記作者ヤン・ムーリエ・ブータンの父）も輩出されており、極右的政治信条はアルチュセール独自のものというより、同校における当時の流行であったようである。」

（7）サッシャ・シモン。ナンシーで『東部共和派』紙の記者を務める。アルチュセールも収容されていた「捕虜収容所XA」時代の回想録を出版している。『心のなかの死』、一九四七年（Sacha Simon, *La Mort dans l'âme*, Nancy, édition Délivrance, 1947）。

SAMPLE
Shoshi Shinsu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

c .

前兆夢

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

21×27cmのサーモンピンクの紙にタイプ打ち。太字〔ゴシック体〕の部分はアルチュセールが一九八四年に青いフェルトペンで強調したもの。一九六四年八月一〇日、一一日、一二日の夢はホチキスで綴じられている（本書まえがきを参照）。

六四年八月一〇日

二日のあいだを置いて見た二つの夢

(1) ぼくは妹を殺さねばならない。あるいは、彼女は死なねばならない。そこには避けることのできない務めがある。ほとんど良心の義務と言ってよい義務。定めの日ないし時間が来る前に果たすべき義務。とはいえ同意のもとに殺す。それは供犠を通して果たされる悲壮な聖体拝領のようなもの（それはぼくにあるものを思い出させる。どこかわからない、とても遠くから、悲壮な聖体拝領者の感覚をともなって、その思いはやって来る……セックスの後味のようなもの。母か妹の臓器、首、喉を、彼女にとってよいことをするために見たような。その感覚は、母であれ妹であれ祖母であれ、介抱するときに味わう感覚に似ている（はっきりした記憶がある。ラロッシュで、彼女が発作を起こしたあとだ）。彼女たちによかれと介抱するのだが、それをするためには、彼らの裸身、性

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

- 13 -

日付なし

強烈な性夢

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

13.5×21㎝の紙にタイプ打ち。ヘッダーに「高等師範学校／事務局」とある。

端から端まで性的な、強烈な夢を見た。ぼくは田舎の戸外にいる。はじめての場所ではない。立ったまま、裸の母と長時間セックスする。乳房は垂れているが、垂れすぎというわけではない。痩せており、肌は褐色。そのあと、つぎからつぎにセックスしまくり、やっては漁るを繰り返す。家のなかのある部屋で、娘を追い回し、彼女の部屋でセックスする。そのまま時間が過ぎる（入学試験の準備期間だった――これまでの夢のテーマを反復している。ぼくは専門を変更するので、受験し直さなくてはならない）。しかし今回の準備では、エティエンヌ[97]とマシュレー[98]が受験勉強を終えたばかりだったので、ぼくは写すだけでいいと知っている。つまりその点では抜かりなく、ぼくはセックスに耽ることができる。ぼくは巨根である。セックスするのが難しいほど。この性器を娘の性器にねじ込まなければならないが、彼女の性器は男性器のかたちをしている。娘が逃げ回っても、ぼくはその都度彼女を捕まえてセックスする。とはいえ危うさもあった。周りに人がいるのだ。しかしぼくは無視する。家に戻ろうと、田園地帯の高いところに向かい、湿地帯だがいい下り道を見つける。娘は弱々しく、ほとんど病人で、ずっと横になっている。それでもぼくは彼女に迫り、セックスする。リスクは色々あるというのに。つぎにぼくは、その家の近くにもう一軒、家があるのを

SAMPLE
Shosh-Shinsu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

解説　アルチュセールにおける精神分析の理論と実践

市田良彦

アルチュセールと精神分析の関係はかなり特殊である。理論的なものの領域では、もっぱらラカンとの関係が問題になる。論文かノートかを問わず、精神分析についてアルチュセールが主題的に書き残したテキストは、すべて、彼が「ラカン理論」を知ってからのものだ。そして、その最初の精華である「フロイトとラカン」（一九六四年）[1]は、「ラカンが声高に求めるフロイトへの回帰」を、『マルクスのために』（一九六五年）に結実する自らの「マルクスへの回帰」プロジェクトと重ね合わせ、ラカンに新しい読者と聴衆を与えることになった。ところが精神分析への個人的で実践的な関係において、アルチュセールは生涯、そんな理論的関係から推定されるようなものを遠ざけているように見える。結果的にではなく、意図的に。

アルチュセールがはじめて精神分析の実践に足を踏み入れるのは、ローラン・ステヴナンの長椅子に横たわったときである。正確な日付は分からない。本書編者は一九四七年のこととしているが（一五七頁注45）、伝記作者は一九五〇年と記している。いずれにしても、親友のジャック・マルタンに誘われて、アルチュセールは精神分析への一歩を踏み出した。ともにすでに共産党員

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

であった二人の関係をなにごとにつけリードしたのは、マルタンのほうだった。入党しかり、ヘーゲルという研究テーマの選定しかり、そのためのドイツ語の勉強しかり、そしてなにより、病歴しかり。抑鬱症状に苦しみ、ステヴナンのもとに通いはじめたのは、マルタンのほうが先だった。党がまだ精神分析を「反動的イデオロギー」とみなしていた時代である。とはいえ二人は、「共産主義」や「唯物論」に疑いを差し挟みながらステヴナンのもとに通っていたわけではない。アルチュセールの回想によれば、マルタンは社会主義を「ソビエト＋電力＋精神分析」と定義していたという。レーニンの定義（「ソビエト＋電力」）に、フロイト的なものを追加していたのである。対立ではなく追加であったから、その友人も、最初の一歩を踏み出すことができたようである。さらに、ステヴナンは「フロイトへの回帰」からは遠い人だ。ラカンの提唱する運動がまだはじまっていなかったからばかりではない。ステヴナンはどこまでも医師であり、一九二六年に設立されたフランス最初の精神分析家集団であるパリ精神分析協会（ＳＰＰ）にも、一九五三年にそこか

（1）　このテキストは最初、共産党系の批評誌『新批評』（一九六四年一二月―一九六五年一月号）に掲載された。共産党は当時精神分析を「反動的イデオロギー」と規定しており、アルチュセールは論文を党のイデオロギー政策に仕掛ける「爆弾」とみなしていた。その後、一九七六年に同じく共産党系の出版社「エディシオン・ソシアル」社から、論文集『ポジション』が刊行されることになったとき、アルチュセールはこの論文を劈頭に置いた。邦訳はルイ・アルチュセール『フロイトとラカン――精神分析論集』（石田靖夫ほか訳、人文書院、二〇〇一年）で読むことができる。同書からの引用はこの邦訳によるが、訳文は変更したところがある。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

エピローグ

二人で行われた一つの殺人

主治医作を騙るアルチュセールの手記

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

■ 21×27cmの紙にタイプ打ち。

それは長く、長く、果てしなかった。尋常ではない病の力。ぼくはこれほど不安を抱えた人物をほとんど見たことがない。これほど強く、これほど日々何時間も続き、これほど長期間にわたる不安をほとんど知らない。

この不安は様々な仕方で現れた……ぼく(n)きみは錯乱現象に見舞われるたびごとに、きみ自身が恐怖を味わうだけでなく、きみを知るすべての人たちを恐怖に陥れた。そして錯乱は、ほとんどつねにあった。錯乱に陥ると、夢幻症現象がすばやく、またあまりにしばしば現れた――夢が体験／生産されると、夢の幻覚はそのまま覚醒状態に持ち越され、現実のものとして体験され、知覚の働きを変える（偽の知覚が生まれる）。午前が終わる頃になってようやく夢から解放されると（夢の恐怖を味わったあと）、きみはくたびれ果てており、一日の残りをつぎの夜の衝撃への準備に費やすことになる。

錯乱と夢幻症には、一連の強い恐怖感がともなっていた。

(1) 捨てられることに対する恐怖がパニックを引き起こす（だれかがぼくきみのもとを去るときには、訪問が終わったということが真のトラウマになる）。きみを不安のなかに置き去りにする別離への恐怖。この恐怖と闘うために、きみはだれかが、たとえ黙ったままであっても物理的にそこにい

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

夢を読む　市田良彦

SAMPLE
Shosi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

1　夢話と二つの「自伝」が作る環――哲学者の「自己への関係」

アルチュセールはなぜ夢の記録を綴ったのだろうか。まず考えられる理由は、編者オリヴィエ・コルペの「まえがき」にあるとおり、あまりにたくさんの夢を見たからだろう。それらの多くは夢を見た当人によれば、目覚めてからの生を侵食するほどの不安の強度をもっていた。だとすれば、書くことによって内容や意味を確定し、距離のある過去のものにしなければ、新しい現在をとりあえずはじめることさえできなかったろう。夢を綴ることはまず、気分の切り替えに必要な作業であったはずである。そして、本書の冒頭に収録された恋人への手紙が語っているように、夢にはやがて事実となる預言的力がそなわっているとアルチュセールが信じていたことも、夢話が記録として残された理由の一つであろう。どこからそんな「夢理論」が彼の半意識に根づくことになったかはさておき、不安夢を見続ける自分がこれからどうなっていくかを、夢占いさながらに「知る」ためにも、彼は夢を意識の俎上にのぼせる作業を続けたと推測される。結果的に、夢話はアルチュセールの過去と未来を文字どおり分節していたことになる。夢話を通して、彼は自らの現在を生みだしていたことになる。

本書の刊行により、アルチュセール著作群を連続した鎖として捉えるための一つの大きな環がようやく完結したことになる。その環を本書とともに形成しているのは、言うまでもなく彼の二つの自伝――『事実』（一九七六年）と『未来は長く続く』（一九八五年）――である。この環の実在性は疑いないものの、それは彼の著作群を今日なお読もうとする者にとり、幸でも不幸でもあるということを、訳者として、また「アルチュセールの専門家」とみなされることを受け入れてきた人間としても、ま

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

アルチュセールの死後出版著作

（生前刊行著作の再刊を除く）

1.

Stock/IMEC刊

アルチュセールの遺稿と蔵書が保管されているIMEC（現代出版史資料館）のオリヴィエ・コルペ館長監修のもと編纂され、Stock社から出版されたシリーズ。

L'avenir dure longtemps *suivi de* **Les Faits** …… 1992

—1985年の**『未来は長く続く』**と1976年の**『事実』**を収録。

—伝記作者のヤン・ムーリエ・ブータンが共編者として名を連ねる。

—2002年に**『未来は長く続く——アルチュセール自伝』**として、河出書房新社より邦訳出版（宮林寛訳）。原著の編者解説は含まず。

—1994年に多数の資料を加えた増補新版（ポケットブック版）が初版と同じ版元から刊行され、2007年に再刊。

—2013年に増補新版がそのままFlammarion社の «Champs» 叢書に移され、再刊。

Journal de captivité, Stalag XA, 1940-1945 : carnets, correspondances, textes …… 1992

—第二次大戦中の捕虜時代の日記、未邦訳。

—ヤン・ムーリエ・ブータンが共編者として名を連ねる。

Écrits sur la psychanalyse : Freud et Lacan …… 1993

—フランソワ・マトゥロンが共編者として名を連ねる。

—2001年に**『フロイトとラカン——精神分析論集』**として、人文書院より邦訳出版（石田靖夫／小倉孝誠／菅野賢治訳）。

Écrits philosophiques et politiques, tome I …… 1994

—編者はフランソワ・マトゥロン。

—1999年に**『哲学・政治著作集』I**として、藤原書店より邦訳出版（市田良彦／福井和美／宇城輝人／前川真行／安川慶治訳）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com